

特別史跡

みず き あと
水 城 跡



1994

太宰府市教育委員会

はじめに

福岡平野と筑後平野をつなぐ狭い溝状の平地の北に、長さ1.2km、幅40m、高さ13mの大きな^{つつみ}堤がある。古くから地元の人々の間で「天智天皇の時代に造られた」と伝えられ、奈良時代に書かれた「日本書紀」にもその名が見られる。それが^{みずき}水城である。



(写真提供：九州歴史資料館)

天智三年この年、対馬・壱岐・筑紫国などに防人^{さきもり}と烽^{とがひ}を置く。

また筑紫に大堤を築き水を貯え名づけて水城^{みずき}という。

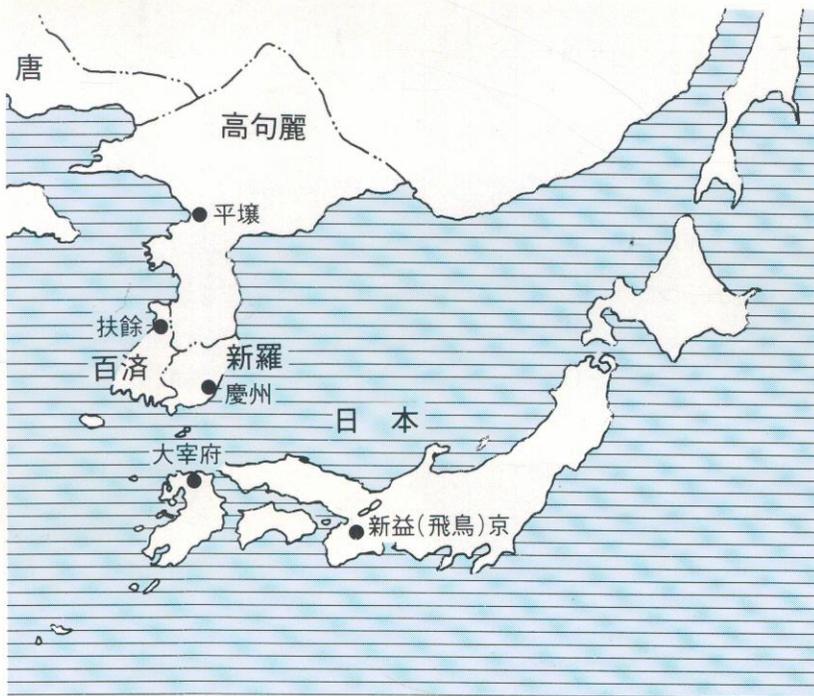
(日本書紀^{にほんしょき})

※ 天智三年 西暦六六四年

防人 防衛のために北九州に派遣

された兵士。

烽 Ⅱのろしを中継して通信をおこなった。



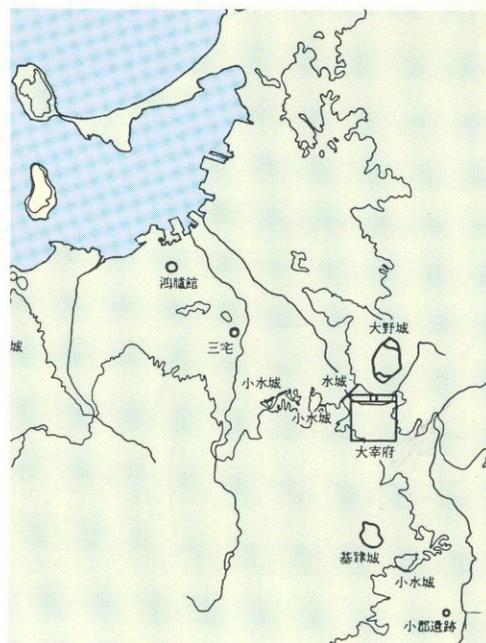
▲ 7世紀後半の東アジア

7世紀の東アジア

7世紀の日本とは日本海をへだてた朝鮮半島の中では百濟・新羅・高句麗の三国が互いに領土を広げようと戦いをくりかえしていた。

663年、日本は唐・新羅に進攻されていた百濟を援助するため海路兵を送るが、白村江で唐・新羅軍に大敗する。

そのような国際的な緊張状態の中で、戦いの翌664年、半島に最も近い筑紫に「水城」が築造された。また、その次の年には大野城と基肆城おののじょう きいじょうが置かれた。



天智四年秋八日。達率答本春初を遣し長門国に城を築かしむ。

達率憶礼福留、達率四比福夫を筑紫国に遣し、大野および椽きいに城を築かしむ。

(日本書紀)

※ 天智四年＝西暦六六五年
達率＝百濟の官人の位

水城の調査

水城の構造については「日本書紀」の記事に「大堤を築き水を貯えしむ」とあることから、長らくダムのような施設ではないかという説が信じられていたが、1930(昭和5)年以来おこなわれている発掘調査によって、堤の南から北に流れる木樋(暗きょ)が発見され、また、北側では幅約60mの濠^{ほり}が発見され、水城は単なる堤ではなく、堤の前後に関連する施設を持つものであったことがわかってきた。

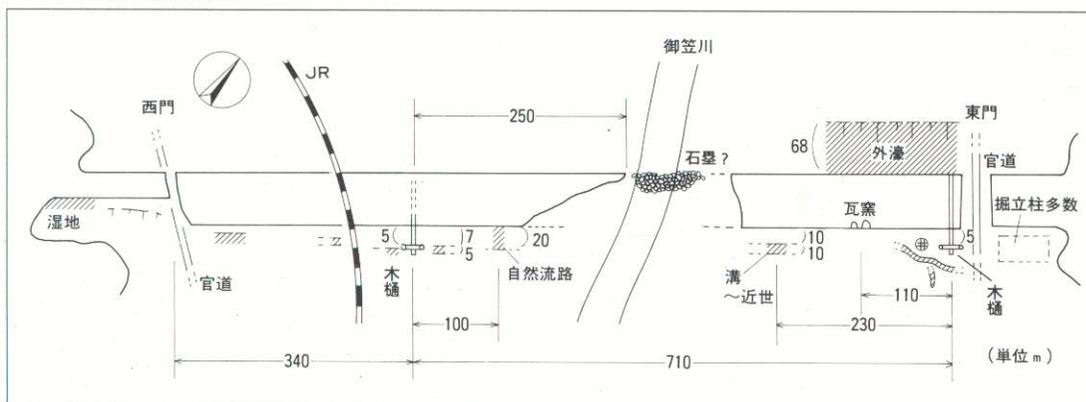
◆ 積み土

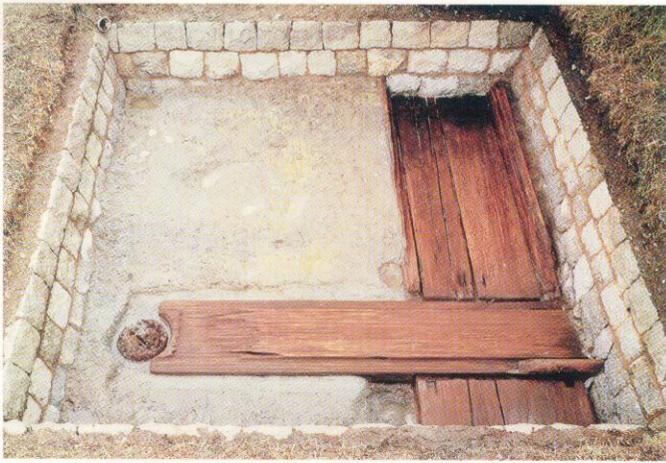
堤自体は全て人手によって積み上げられたものだが、調査によって規則的に積まれた様子が観察された。運ばれた土はそのつど平たく均され、5～30cmほどの厚さごとに踏み締められ、質の違う土を交互に積み上げている。



▲ 水城の積み土断面

▼ 水城の関連施設





▲ 水城木樋 (九州歴史資料館)

◆ 木 樋

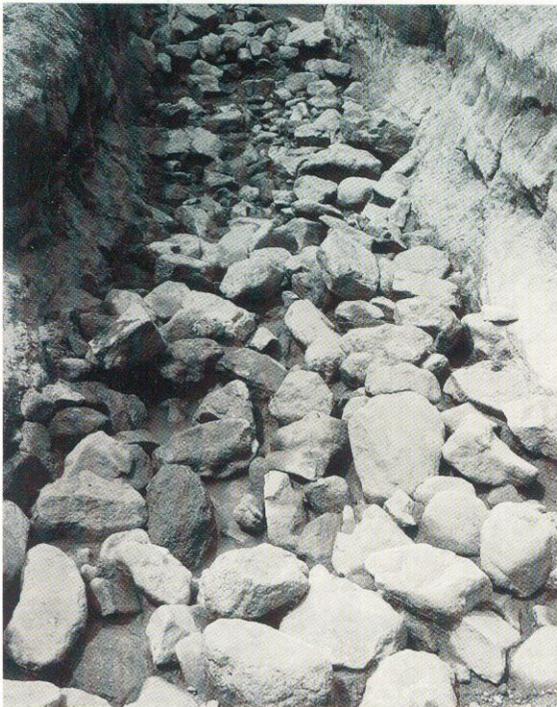
国道3号線の脇で1930(昭和5)年に発見、調査され、現在では南側から外濠に水を流すための取水口と考えられている(詳しくは次ページ)。同じものがJR鹿児島本線東側でも見つかっている。

◆ 木樋の底板

樋の大きさは内ので幅1.2m、高さ80cm。底板は縦に2枚の板を交互に組み合わせたもので、板の厚さは20cm。鉄製の「かすがい」(12ページ)でとめている。板材は九州歴史資料館(太宰府市)で見学できる。



▲ 木樋の発掘状況 (九州歴史資料館)

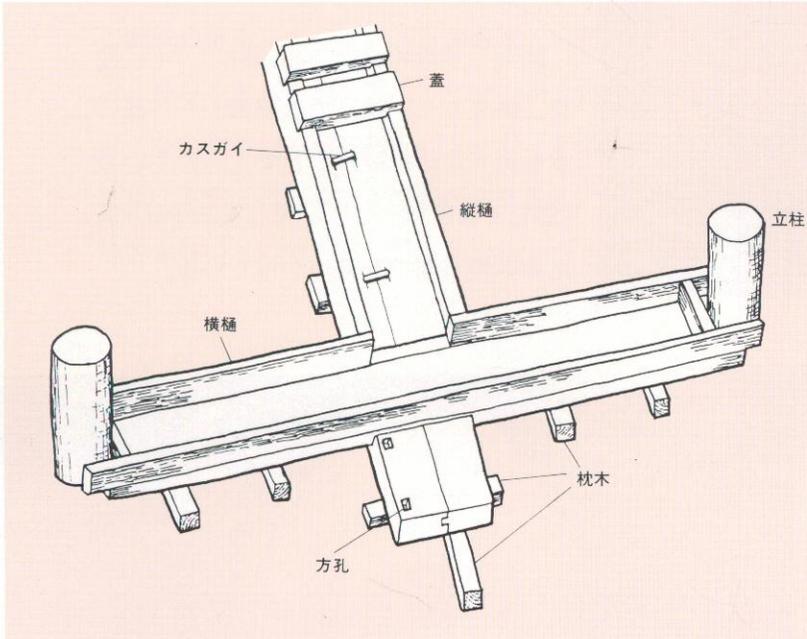


▲ 石敷き遺構 (九州歴史資料館)

◆ 石敷き遺構

九州自動車道路(高速)の建設の際に橋脚となる水城の御笠川の右岸の部分が調査され、大量の石積みが発見された。石の大きさは50cm角ほどで、高さ1mほどに積み上げている。濠に水を上げる堰もしくは石塁ではないかという意見もある。

外濠と木樋



▲ 取水口復原図

水の取り入れ口の構造は、7mの間隔で建てられた太さ50cmの柱の間にT字形に木樋が組まれている。柱は深く掘られた穴の中にしっかりと据え付けられている（右側写真）。おそらく取水の弁を支えるものであろう。木樋の下は樋の角度を調節する枕木を敷き、上には木ぶたがかぶせられる。底板の合わせ目にはカスガイが打ち込まれる。このような構造と規模を持つ施設はほかに例がない。

もし、濠に水が溜められていたならば、北側から水城を眺めると水に浮かぶ城壁の様に見えたことだろう。

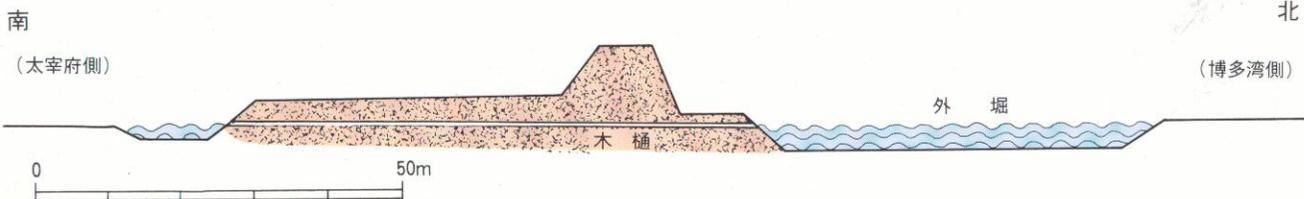
水城には北側に幅約60mの濠があり、ここに水を溜めて外から来る敵を防ぐ役目をしたと考えられている。

濠に水を溜めるために土塁の内側から外の濠へと水をひく木樋が2カ所で発見されている（前ページ参照）。樋は水城の土塁の下をゆるやかな傾斜でぬけている（下図）。



▲ 取水口立柱の検出状況

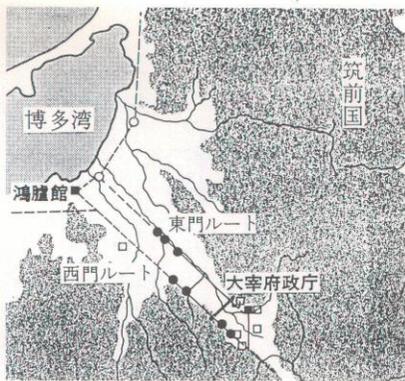
▼ 水城縦断面図



古代の交通と水城

奈良時代（8世紀）になると都（平城京）が唐にならって大々的に整備され、地方にも国府を中心とした官衙（^{かんが}官衙）が国ごとにつくられた。これにあわせて都と地方とを結ぶ交通網（^{かんだう}官道）も整備され、大宰府周辺でも調査によって古代の道路が確認されている（前田遺跡など）。大宰府から博多湾に向かう道は2つのルートが発見され、それぞれが水城の西と東にあったと伝えられる門を通過している。

西の道は鴻臚館跡に、東の道は博多遺跡群に向かっている。東門周辺の調査では奈良時代以降に瓦や埴を使った建物の存在が明らかになった。平安時代には水城に関があったとされ、かつての防衛施設が大宰府の視覚的な入り口や範囲を示す施設として変わっていったことを示している。門に使われていたと伝えられる礎石はそれぞれ現地で見学できる（次ページ参照）。



古代交通網図



▲ 水城東門と旧街道（左は現国道）

東門を通過する道は近世の街道と重複しており、その道は昭和の初め頃に国道3号線となり、現在でも大宰府と博多を直線で結んでいる。

▶ 前田遺跡（官道）から北の水城西門をのぞむ（矢印）





西門礎石

水城見学マップ

バス路線(下車は西鉄バス「^{くぶんしまえ}国分寺前」)
 のぼり; 麦野・比恵經由博多駅ゆき
 くだり; 三田市經由朝倉街道ゆき
 (※ともに約2時間1本の間隔で運行)



東門礎石

関連する展示施設

九州歴史資料館 (太宰府市石坂 tel:092-923-0404)
 大宰府展示館 (太宰府市観世音寺 tel:092-922-7811)

至国分寺

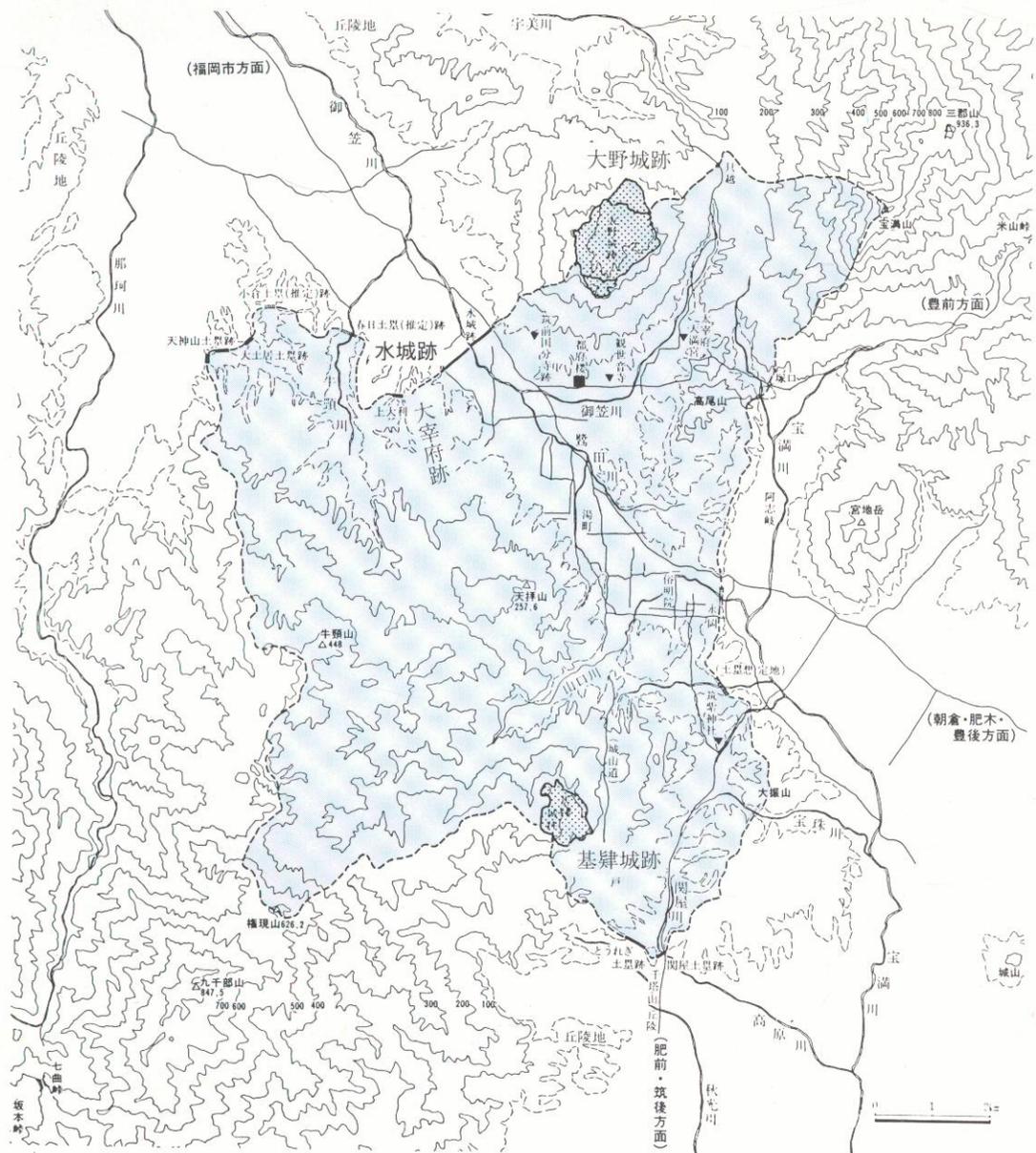
57.0

57.0

大宰府の羅城と水城

水城は、これのみで一つの重大な役割を示していることはこれまで述べてきたとおりであるが、周辺の遺跡と関連して捉えるとなおその姿が明確になってくる。

水城の東側は、天智天皇4年(665)に建設されたとされる大野城のある大城山に接しており、地形上は完全に繋がっている。また西側の丘陵ともつながりその先には上大利、天神山、大土居といった小水城が、規模の差はあるものの同じように大宰府へ入ることのできる谷地を塞いでいる。さらに大野城と同じ時期に建設された基肄城は大宰府の南を護



阿部義平氏の提示した大宰府羅城



▲ 大野城太宰府口城門 (九州歴史資料館)



▲ 大野城ハツ波礎石群 (九州歴史資料館)

の景観を形成するまでには至らなかったようである。しかし、自然地形を取り込んだ羅城の存在が肯定されるならば、同じく天武天皇13年(684)、同14年(685)に朝廷が信濃へしきりに遷都しようとして企てていることは、こうした自然の要塞とも呼べる羅城を建設するに適した位置を、山深い盆地である信濃に求めたのではないかと想像される。このように天武朝には羅城建設の機運が日本のなかで高まっていたようであり、天智朝(662~671)に建設が計画され、持統朝(687~696)にある程度の完成をみた大宰府が、阿部氏のこのような羅城の形態を呈していてもおかしくはないであろう。このような羅城が実際に完成したのは、ここ大宰府だけであった。

るかのごとく配置されており、恣意的な配置が考えられる。この基肆城の東側は平野の狭小部となっており、関屋土塁、とうれぎ土塁とよばれる水城に近似した形状の遺跡が確認されている。

阿部義平氏(国立歴史民俗博物館)はこれらの遺跡と大宰府の平野を取り巻く丘陵の尾根線をつなぎ、広大な羅城の存在を想定している(9ページ図)。羅城は一般に高い城壁に囲まれた都城をさしているが、阿部氏はこうした自然地形をうまく読み込んだものも羅城ではないかとしている。これによれば、水城は広大な羅城の一部を形成するとともに大宰府の防備にとって重要な位置をしめていたことになる。

なお、我が国で羅城を建築しようとしたのは、『日本書紀』によれば天武天皇8年(679)に難波宮において試みられたが、実際に羅城として



▲ 基肆城土塁 (九州歴史資料館)



▶ 基肆城水門

(九州歴史資料館)

水城に関連すると考えられる土塁を小水城という。



▲大土居 (九州歴史資料館)

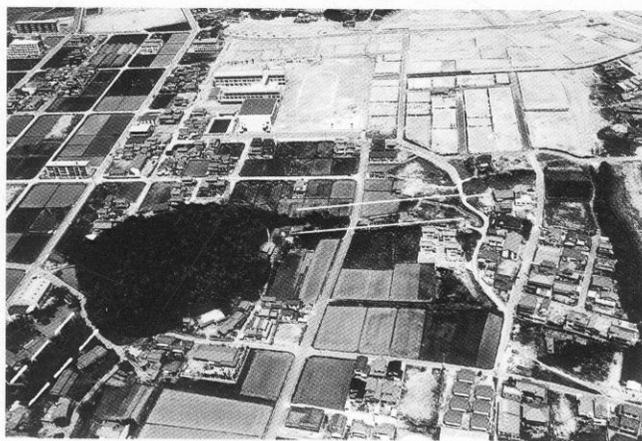
◆ ^{おおどい}大土居の小水城 (国指定史跡)

春日市大字上白水にある。丘陵間の低地に東西長さ約75mの土塁が残されている。発掘によって堀が見つかっている。

(このほか春日市内では大字小倉^{こくら}と春日にも土塁があったとされている。)

◆ ^{てんじんやま}天神山の小水城 (国指定史跡)

福岡県春日市大字上白水^{かみしろうず}にある。丘陵間の低地に東西長さ約70m、高さ3m、幅20mの土塁が残されている。南北方向にもあったと推定されている。



▲天神山 (九州歴史資料館)

◆ ^{きやま}基山の小水城

佐賀県基山町のJR基山駅^{せきや}付近に「関屋土塁」、「とうれぎ土塁」がある。調査などで大宰府の水城と同様に細かい積み土で形成されたことが確認され、基肆城南辺を東西に囲む施設と考えられる。



▲基山 (九州歴史資料館)

これらの他、水城と似た工法で築造された土塁として福岡県大野城市大字上大利、久留米市上津町、佐賀県上峰町大字堤の土塁などがある。

水城出土の遺物



◆ 墨書土器

「水城」と墨でかかれた土器が木樋取水口の南側で発見された。この発見によってここが文献に書かれた水城であることが証明された。

※ このほか大宰府では大野城から「大城」、観世音寺から「観世音」の墨書土器が出土している。遺物は九州歴史資料館、大宰府展示館で展示されている。

▲「水城」銘墨書土器（九州歴史資料館）

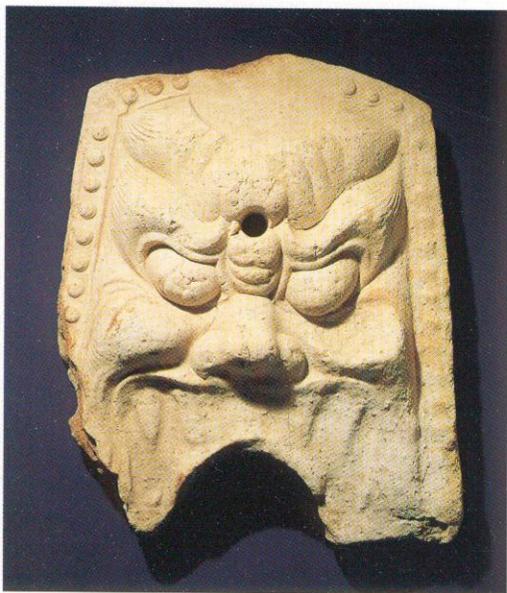
◆ カスガイ

木樋の底板をつなぎ止めていた長さ25cm、幅5cmの鉄製のもの。

※ 九州歴史資料館、大宰府展示館で展示されている。



▲ カスガイ（九州歴史資料館）



◆ 鬼瓦

御笠川の河川の工事中に発見されたもので、大宰府政庁で使用されていた鬼瓦と同じデザイン。長さ49.7cm、幅40.2cm、厚さ13.6cm。8世紀のものと考えられる。太宰府市指定文化財。

※ 大宰府展示館で展示されている。

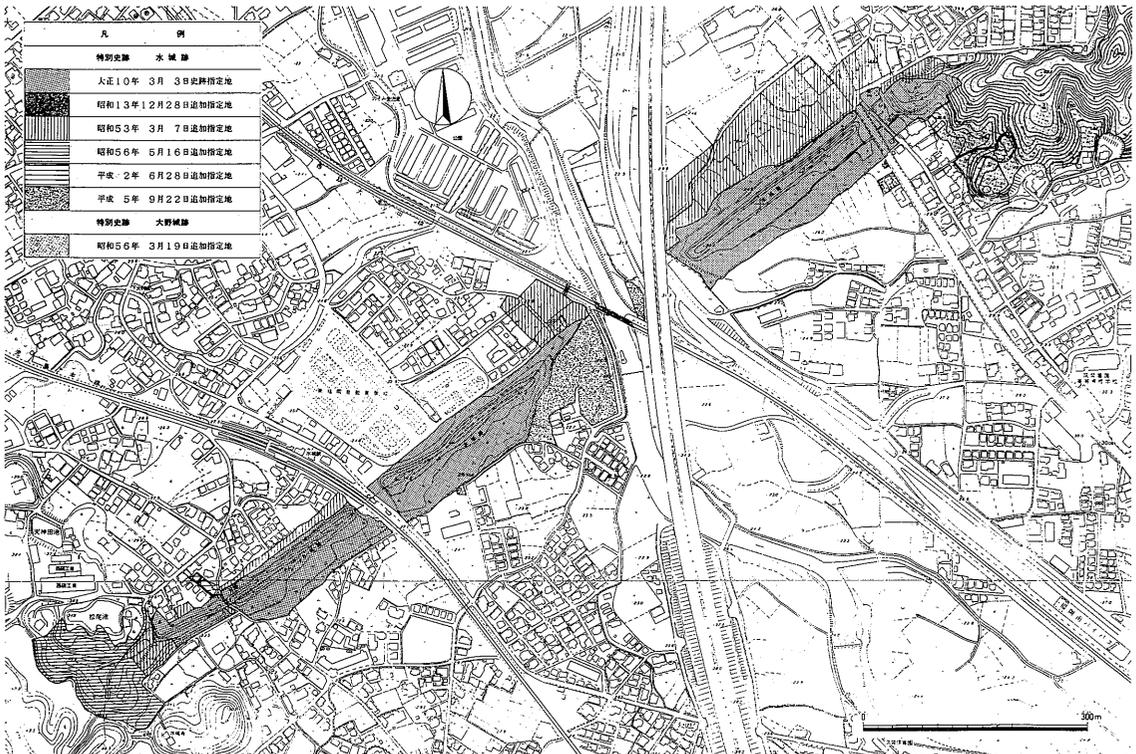
▲ 鬼瓦（奈良時代）

水城の保存

【保存の経緯】

太宰府市における水城跡の保存に関する経緯を編年的に記述すると、次のとおりである。

- 大正10年 3月 3日 内務省は水城跡の史跡指定を告示する。
- 昭和13年12月28日 内務省は木樋取水口部分（国分側）の追加指定を告示する。
- 昭和28年 3月31日 文化財保護委員会は同日付をもって同史跡を特別史跡に指定する。
- 昭和40年～昭和47年 九州縦貫自動車道が水城跡を通過する案について、建設省・日本道路公団と文化財保護委員会(昭和46年 3月以後は文化庁)・福岡県教育委員会との間で水城保存をめぐる協議交渉がなされる。
- 昭和45年度 水城跡の公有化を開始する。
- 昭和48年度 福岡県教育委員会は水城跡の環境整備を開始する。
- 昭和50年 5月 福岡県教育委員会の第5次調査により「外堀」が検出される。
- 昭和53年 3月 7日 文部省は土塁前面約60mの範囲と土塁西端部の追加指定を告示する。
- 昭和56年 5月16日 文部省は土塁西端の取付部分の追加指定を告示する。
- 平成 2年 8月 太宰府市教育委員会の第17次調査（吉松側）により木樋取水口部分の遺構が検出される。
- 平成 5年 9月22日 欠堤部及び土塁内側の一部の追加指定を告示する。



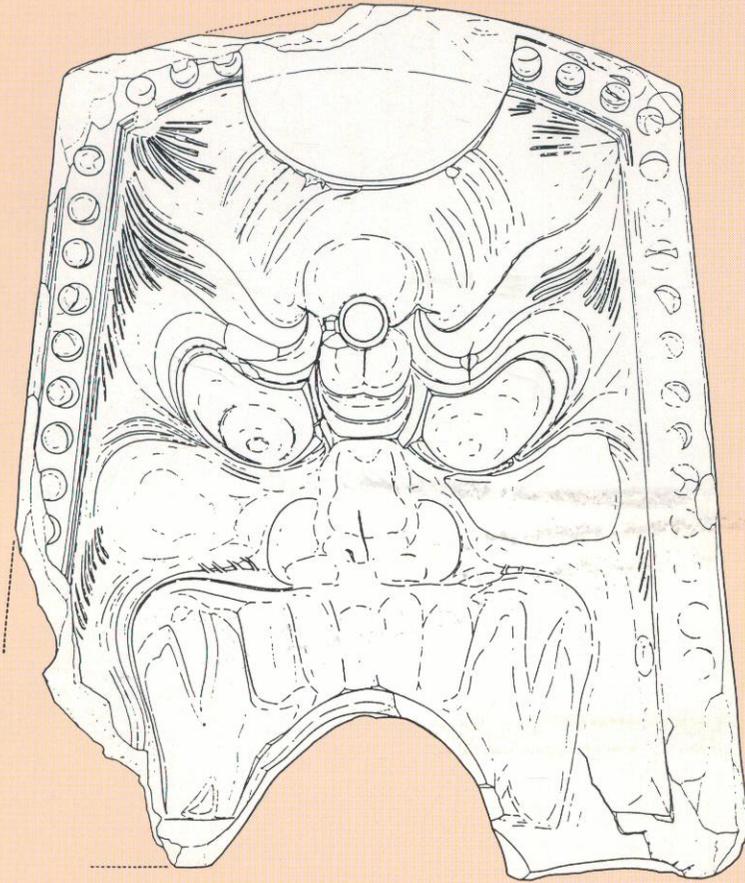
水城跡史跡指定過程図



▲ 昭和30年代頃の水城（「太宰府」アサヒ写真ブック87号 昭和34年朝日新聞社より）

▼ 現在の水城（九州歴史資料館）





0 10 20cm

水城出土鬼瓦